

深代惇郎著「深代惇郎の天声人語」朝日文庫、朝日新聞出版 2015年9月30日刊を読む(Ⅲ)

蜻蛉日記

1. 京都で1日遊んだ。「ことしのモミジはよろしおへんな」と、高雄の紅葉を案内してくれた人は気の毒そうな顔をしてくれたが、どうして、どうして、みごとなものだった。逆光の夕日に深紅の葉がすき通るときは、この世のものとは思えぬ美しささえあった。
2. 京の旅は、歴史への連想の旅でもある。風物に歴史を思い、歴史がまた風物に色をそえてくれる。晩秋の山を見ながら、後花園上皇が将軍足利義政をいましめた詩「満城の紅緑たが為に肥ゆる」を連想したのは、銀閣寺へ行く途中のせいだったかも知れぬ。
3. 義政は銀閣寺を作るために、飢饉も戦乱もさして念頭になかった。最高の趣味人であり、最低の為政者であった。応仁の乱で荒廃した当時の京都を描いた有名な歌は「なれや知る都は野辺の夕ひばり、あがるを見ても落つる涙は」。この作者が今の世にいたら、こんな歌になったろうか。「なれや知る都はのべつ物価高 あがるを見ては落つる涙は」。
4. 高雄の帰り、鳴滝を通ったときの連想は『蜻蛉日記』の作者「道綱の母」である。夫が通ってくるのを、妻はただひたすら待つ。『蜻蛉日記』とは、そのねたみと悲しみをつづった『やきもち日記』でももある。夫の前には絶えず女性が現れ、また去っていくが、いずれにしても自分のもとは帰ってこない。
5. その出世が思うにまかせぬときにだけ、つかの間の夫婦の幸せが訪れるが、栄達するほどに夫の心は離れてしまう。出世を喜び、そして悲しむ。こうした苦悩を超えるため、鳴滝の寺にこもる。この辺りだろう、という鳴滝川の近くは、ぼうぼうたる雑草と林を風が吹き抜けていった。将軍義政の妻日野富子は、自分の息子を将軍にするために応仁の乱の一因を作った。「道綱の母」は、息子の正月参賀の支度をするとところで『蜻蛉日記』の筆を置いている。満山の紅緑をぬって車を走らせながら、2人の女性にしばし思いがあった。(1974年11月17日)

P490 ~ 491

— 2015年11月24日 林 明夫記 —